



(c)RyoichiKAWA/JapanGoalBallAssociation

聴覚・触覚を研ぎ澄ましチームワークで

ゴールを狙う

静寂のなか、熱く激しく闘う
ゴールボールの魅力

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

ゴールボール・スポーツマネージャー

近藤和夫
こんどう かずお



今、ゴールボールが静かに熱い。視覚を遮断しボールの音やコート上の触覚を頼りに、感覚を研ぎ澄まして互いのゴールを狙う。繊細かつ激しい競技だ。日本勢は近年実力をつけ、東京2020パラリンピックでのメダル獲得も期待されている。障がい者も健常者ともに楽しめる幅広いスポーツを目指すゴールボールとは。その競技の魅力や観戦の見どころなどについて伺った。

躍動感溢れる激しいスポーツ…ゴールボール

ゴールボールは、第2次世界大戦で視覚障がいを負った人たちのリハビリテーションプログラムとしてヨーロッパで考案された。スポーツ競技、特に球技の多くは、ゲーム展開や選手同士のアイコンタクトなど、視覚情報とそれに基づく判断が重要な要素ですが、ゴールボールは視覚を完全に遮断して行います。

各チーム3名ずつが、バレーボールと同サイズのコートにゴールを背にして相対し、互いのゴールをめがけてボールを投げ合い、得点を競います。試合では、視覚条件をそろえるため、競技者全員が光すら通さないアイシールド(目隠し)を着用します。選手たちは、テープの下にひもが張り巡らされたラインを触って自分の位置を確認し、ボールのなかに仕込まれた鈴の音色や仲間の声を頼りに動きをとらえます。視覚情報を聴覚や触覚によって補うわけです。見えないなかでもゲームを視覚化し、個々の力や技をチームの総合力に変えて競い合う球技なのです。

ご覧になったことがない方は、もしかするとのんびりとした様

子を思い浮かべられるかもしれませんね。でも実は想像よりもはるかに激しいスポーツです。1.25kgの重さのあるボールを用い、その球速は、男性選手では初速60kmから70kmにもなります。ディフェンス側の選手はボールに接触したら10秒以内には投げ返さなければいけません。ほぼ8秒に1球、接戦になると1試合で1000球以上が飛び交い、スピーディーで、ボールをキャッチしたときの迫力もあります。競技時間は前後半12分ずつで、サッカーなどに比べれば短く感じますが、相手のボールをサッカーのキーパーのように体を張って阻止し、ボールを取ったら起き上がって即座に投げるため、12分間ずっと反復横跳びをするようなもので、選手も激しく消耗します。緊張感と躍動感のあるスポーツなのです。

研ぎ澄まされた感覚とチームワーク

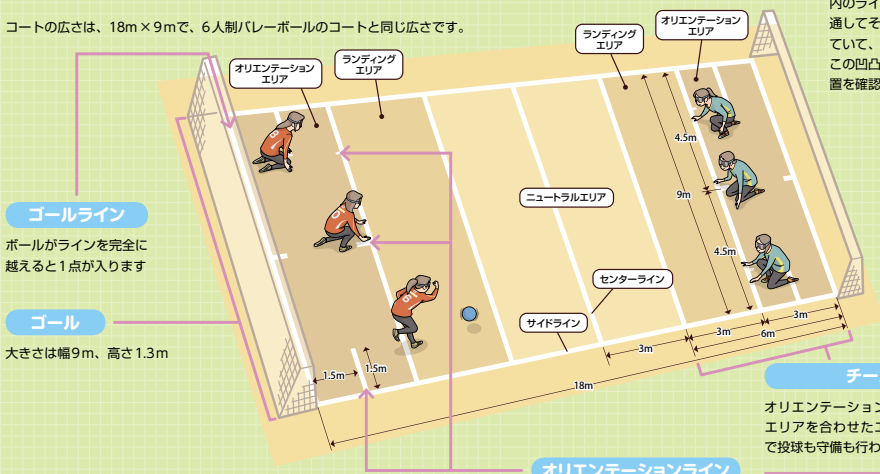
ゴールボールは、1976年のトロント・パラリンピックで正式競技となり、日本では1992年から選手育成を開始。私は海外大会の視察やルールの翻訳作業など、まさに手探りでチーム創設にかかわってきました。1995年のアトランタ予選大会に男子チームが初参加した際、海外との実力差をまざまざと見せつけられました。体格差のある海外選手と互角に戦えるのか。ベンチワークの未熟さも目立ちました。そこから日本ゴールボールの進化の始まりでした。

まず取り組んだのは、選手個々の力を培っていくこと。選手に要求されるのは、速いボールを投げるためのパワー、制球力、瞬発力、あとは思い切りの良さです。選手はこれらを習得するまでに時間がかかります。自分の投げたボールがイメージどおりのコースや速度となっているか、目視はできないわけですから。そこでコーチやスタッフが根気よく情報を補っていく必要があります。

また、ベンチワークや戦略を練るうえで、チーム連携も課題となります。例えば、相手が投げてきたボールを1人の選手が防げ

使用するコート・主なルール

コートの広さは、18m×9mで、6人制バレーボールのコートと同じ広さです。

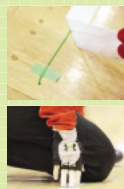


ゴールライン
ボールがラインを完全に越えると1点が入ります

ゴール
大きさは幅9m、高さ1.3m

ラインの下の糸

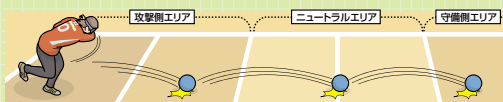
ラインアウトラインを除くコート内のラインには、床との間に糸を通してその上からテープが貼られていて、凹凸があります。選手はこの凹凸の感触を頼りに自分の位置を確認しています。



チームエリア

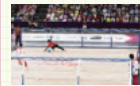
オリエンテーションエリアとランディングエリアを合わせたエリアで、このエリア内で投球も守備も行わなければなりません

正しい投球の例



ゴールボールでは、攻撃時、基本的にはボールを転がしますが、投げたボールが「攻撃側エリア」と「ニュートラルエリア」の両方の床でパウンドしなければ反則となります。反則を犯してしまうと相手チームにペナルティローが与えられます。

ペナルティローとは？



ペナルティローでは、反則を犯してしまったチームがたった一人しか守備に入れない状態で、相手チームに投球機会が与えられます。攻撃側には得点のビッグチャンスで、ゴールボールにおいては、勝敗の行方を左右するほど重要なルールです。

ずに得点された。それは気づかなかったのか、反応が遅れたのか、あるいはボールに届かなかったのか。それを他の選手に言葉にして伝えないといけない。アイコンタクトはできませんから、声で伝えたり床をたたいて位置を教えたり、情報を共有しないと相手のボールを防いだり、得点を得たりすることはできません。ベンチも含めたチームのコミュニケーションがものすごく大切な競技なのです。

晴眼者にとっては、何も見えないのでとても難しいスポーツかもしれません。しかし、トレーニングによって十分に今挙げたような課題を克服できます。視覚に障がいのある選手たちは、聴覚や触覚などの感覚を上手に使います。初めてプレーする体育館でも、座った瞬間に「この体育館は新しいですね」とか、フロアリングの状態を触覚だけでつかめます。また、落とした硬貨が50円玉なのか100円玉なのか、音で聞き分けることもできるのです。

選手のパフォーマンスを後押しする会場の音

この競技の特殊性は音です。選手は音が頼りなので、コート以外の場所が静かな状態でなければ競技ができない。でも、お客さんだって応援したい。すごいプレーがあったら素直に拍手したい。そこは私たち運営サイドにとってかなり重要な課題です。お客さんの応援と選手たちの集中力。その両方をどれだけうまく環境整備していけるかが、東京2020大会の運営評価になると思います。

観戦マナーの周知でも工夫を凝らしています。観戦者には、事前の告知はもちろん、試合中にも「静かにしてください」といったアナウンスやブラカードによって協力をお願いします。一方で、レフリーの笛でタイマーが停止、試合が中断すると一転、シンとした会場にアップテンポなBGM音楽を流す。その間はお客さんも自由に声を出して応援してくださいという演出です。こ

のようにメリハリがあって観戦が楽しめる運営を目指しています。国内大会ではすでに行っていますが、大規模なパラリンピックでうまく成功させられるかどうか、運営の最大の課題です。

まずはこの世界の一端を体感してほしい

もちろん、東京2020大会での日本勢の活躍も大事ですが、大会を契機として、このスポーツの認知度をもっともつと上げていきたいと思っています。ゴールボールは、ボールとアイシエードがあれば体験はできます。体験会などを通じて、まずは、用具やプレー方法に工夫を加えたスポーツがあること、創意工夫により障がいのある人もない人もともにできることを体感してもらいたい。

また、試合中の実況解説なども重要だと思っています。ゴールボールの観戦者には視覚障がい者の方々も大勢います。かつて、そうした方々への配慮が足りず、途中で帰られてしまったことがあります。それがものすごく残念で、多くの人が楽しめるよう、実況解説のあり方を模索しているところです。

スポーツとしていろいろな競技があって、障がい者、健常者、それぞれいろいろな楽しみ方をしてほしいと思います。このパラリンピックをきっかけにゴールボールにもそうした関心が向いてくれると、うれしいです。

日本のゴールボールは世界でメダルを狙える位置にあります。選手たちが何年も鍛錬してきた力を発揮できれば、東京2020大会は自然に盛り上がるでしょう。また良い結果につながれば、組織委員会の僕らの苦労なんて一瞬で吹っ飛ば。今、開催に向けて本当に多方面から、たくさんの方々の協力を得ています。大会を成功させ、皆さんに心の底から感謝したい。そうした最高の場面を思い描きながら、準備を進めています。

(取材日：2019年5月9日)